

ドイツ労働者評議会運動の起源

The Origins of The Movement for Workers
Councils in Germany 1918~1935

"Raden" by
With a foreword by Joe Thomas
Coptic Press

片山政幸 訳

英語版への序文

今日ここにはじめて英語版として出版される小冊子は、はじめオランダの評議会共産主義者のグループの雑誌、『評議会共産主義』の一九三八年第三号に発表され、ついでフランス語に翻訳されて『国際主義』誌の一九五二年第四号に所収された。その後さらに改訂され、ホルディガイストの雑誌『パランスシート』の一九三五年一九〇二〇号のために書かれた「原理の概要」がつけ加えられて、『労働者情報通信』誌一九六五年四二号に掲載された。これはそのフランス語版から英訳されたものである。

この小論文は大きくわけて、次の二つの部分に分けられる。

a 一九一八年から一九二九年までの間の、その後永続すること
がでずに歴史の舞台から消え去っていったドイツの評議会共産
主義の批判的分析の部分。

b オランダの評議会共産主義者によって書かれた「共産主義社
会の生産と分配の基本的原理」の研究の中から、一九三〇年に生
み出された「原理」に関する部分、である。

最初の部分、すなわちイギリスの労働者階級史に平行するドイ
ツ労働者階級史のきわめて重要な時期の分析は、イギリスの戦闘
的、革命的労働者および学生への有益な手引きとなるであろう。
一九一八年から一九二〇年に到る時期のドイツにおける評議会共
産主義運動の活動と思想に関する英語の文献は非常にすくない。
有名な理論家を有さなかった一九一八年以前の運動と思想につい

てはさらにすくないのである。

と云うのは、労働者階級の歴史は、常に何がその運動を歴史的に準備し、労働者階級を外からつき動かしたかを解釈する、理論家」の理論より先に展開するからである。労働者階級が資本家階級との長い闘争の道程において築きあげる組織の形成と思想は、多くの「知識人」が考えるように思想なくして自然発性的に出て来るものではない。思想と行動、と思想は周知のとおり分ち難く相互に作用するものである。

労働者評議会の目的と組織の形態に関する思想は、労働者階級自身の中から生まれて来た。その思想の基礎は決して新しいものではなく、古く労働者階級が出現したごく始めの頃から存在したものである。

イギリスの労働者階級に関する限り、新しい社会の行政組織の唯一とつ手段となる労働者評議会の思想は、一九世紀初頭の全国統一労働者組合の活動のなかに見い出される。

イギリスに初めてあらわれたそれは、イギリス労働者階級の特質によるものではなく、イギリス資本家階級が工業の発展によってやつと羽根が出そろったばかりの段階であったために、かろうじて労働者の一貫した運動として実現できたにすぎなかったのである。

社会主義や共産主義が一国的な問題ではなく世界的な意味をもつようになつてから、資本主義の発展は労働者階級のいろいろな形態の組織を生み出し、はじめはヨーロッパで次いで新世界へと拡がって行った。結果的に言うなら、別稿のためになく需要に応じた生産に基礎を置く新しい社会と、その社会がいかにして獲得

した社会をいかにして運営するか、と云う問題が多くの先進的労働者の関心をひくところとなつた。アメリカで発達した新社会の思想に加えて、ヨーロッパの国々でことにてフランス、ドイツ、イタリア、オランダなどで発達した新社会の思想はすべて一国から他国へと伝播し、各国で交配分合し、新社会の思想の成長に大きく貢献している。だが、ロシアやポーランドなどの国々や、もっと工業化の遅れた国々の比較的小規模の労働者階級のなかで生まれた思想、とくに一九〇五年以降のロシア式の「労働者・兵士評議会」として知られる新社会の思想と活動を、我々は無視すべきではない。

しかしこれらの新社会の思想は、不動のものとしてあるのではなく、運動の過程において連続的に拡がりをもち、発達してゆくものである。一八七一年のパリコミューンにおけるフランス人の歴史的で英雄的な活動は、今日、我々が労働者権力への途上で幾多の困難をどのように克服し、最終的には階級なき社会をどのようにに建設するかを考える上に有益な示唆を与えてくれる。このように、一八七一年のフランスのパリコミューンの教訓と一九〇五年および一九一七年のロシアのソウリエト（労兵評議会）の教訓とはまず第一に充分に噛みしめなければならない。なぜなら、今日、ソウリエトもパリコミューンも労働者の手から離れて、貧農を指導する労働者階級の利益とは無縁なものとなり、ソウリエトはそれを社会統治のために利用する新社会——官僚の道具となつていからである。

それ以降、労働者階級は資本主義をうちたおすために同じような試みを幾度となく続け、敗北し、大きく後退して来た。なぜか

と言うに、理論上においても行動上においても、過去の教訓が十分に消化されていなかったからである。例えば、一九二六年のイギリスにおけるセネストの経験はくり返し検討する必要がある。一九三六年のスペイン労働者階級の経験についても同じである。もっと最近のことでは、ハンガリアにおける蜂起と一夜の労働者評議会の創出を我々は研究し教訓を自分のものにしなければならぬ。より適確な例としては一九六六年の「フランスの五月」がある。そこでは、労働者評議会の性格と役割の問題が労働者にとって勝利へ向って前進するか敗退させられるかを賭ける鍵となる重要な問題としていま一度提出されたと言えよう。

長い間、殆んど忘れ去られていた労働者評議會を追求する必要が、ドイツ、フランス、イタリア、以上の国々ほどでないにしてもイギリスにおいて、ふたたび歴史の議題にのぼったことは注目すべきことである。同様に、ポーランド、チェコ、それにロシアにおいてさえも労働者階級がいかにして権力を奪いかえすがが広く——非合法的情况のなかにおいてすら——討論の主題になっている。いまや再び、問題の鍵は労働者評議會にある。官僚主義との熾烈な対決のなかで労働者がいかにして労働者評議會を実現するかが問題である。中国の新しく生まれ出てきた労働者階級が、同じ方向に向って何を考え何をなそうとしているかは今日誰も知らない。

したがって、次のドイツにおける労働者評議会の運動に関する断章はドイツにおける評議會運動の発展にかなりの重点を置いている。この短い研究が議論の余地を残すものとなったことはやむを得ない。これは党派的な記述である。なぜ一九二九年にこの運

動が事実上立ち消えになったのかと言った歴史的事実の解釈書、また同じことについて記述された書物は他にもある。しかしこのことは決してここに諸君の前に提示せんとする歴史的記述の価値を損ずるものではない。なんとすれば、自由な論争や討論は労働者階級の運動にとって活動力の源泉であり、論争・討論は絶えることなく闘わされなければならない。このような論議に戦闘的、革命的な労働者のみに参加するものであると考えるべきではないし、またこれらの思想が「純粋」な形で労働者の各層へ広く浸透するものであると考えるべきでもない。

資本家階級とその社会改良派イデオログは労働者階級の権力奪取と、いったん勝ち取られた社会を運営する手段としての労働者評議会の概念に反対することにやっきとなっている。

資本家階級の基本戦略は、言うまでもなく、資本主義制度が社会主義に道をゆずり、労働者評議會が新社会を運営する手段となることを否定することにある。

だが、これは圧制の解消を求める労働者階級をおしとどめるには充分でない。資本家階級は主として社会改良派社会学者、経済学者、その他あらゆる種類の政治評論家を通して、労働者に労働者評議會の真の役割から目をそらせるための宣伝をとどめなく流布しているのである。

この国の資本家階級の左派である労働党は、最近、基本政策宣言として一冊のパンフレットを刊行した。題して『産業民主主義』。これは固定化された資本主義制度のなかに労働者評議會の考え方をくみ入れることをねらったものである。彼らは労働者評議會の統一的で革命的な概念を、資本主義を延命させるために骨ぬき

し、資本家階級と資本主義国家に従属するようなものに変えることを願っているのである。

またあるものは、フェビアンの戦略を用いて、労働者が私的または国家の資本制経済の両領域において搾取されることを継続するための新たな「工業」機関の設置に労働者が直接組み込まれていく、言わゆる資本主義社会運営への労働者参加という形で、労働者による労働者評議会を通しての生産手段の所有と官理の思想を、資本家階級と資本主義国家のなかに同化することを追求している。

以上述べた資本主義思想の基本線は、生産手段の労働者階級の所有と労働者評議会を通しての管理の完全な否定である生産手段の国有化の思想に他ならない。労働者階級は、労働者管理を伴った「国有化」の思想を売りつけられている。不幸にして今日においては、このような思想が様々なトロツキー主義者のグループ、スターリン主義的共産党の繰り出した宣伝によって労働者階級のいろいろな部分に浸み込んでいる。我々はこのような思想と闘わなければならないが、労働者評議会によってのみ統治されると言う労働者権力の概念を不断に前進させることにおいて、資料の少ないイギリス（そして日本・訳者）でこの小冊子は有益な一助たり得るのである。

つたかずら式の労働者権力の思想は、イギリスにおけるアナルコサンジカリズムの運動の援助なくしてはあり得なかつた。労働者評議会の概念を明確にすることに努めたアナルコサンジカリストたちは、いまやこのような思想と対決することを要精されてい

る。

産業戦士とあらゆる種類の革命家としてのアナルコサンジカリストすべてにとって極めて苦い試練は、国家の問題に關していかなる態度をとるかと言うことである。マルクス主義者もアナキストも、共に、国家が廃絶されなければならないと考える。民主的な選挙による、また必要に応じて労働者評議員を罷免できる労働者権力の確立は、資本主義社会とその国家のいずれの存続とも鋭く対立する。資本家階級の国家権力は、労働者評議会が広い基盤の上に存立されるや直ちに打ち倒されるであろう。二重権力の一時期がその間に存在する。一方に労働者評議会の管理があり、他方に資本家階級の国家とあらゆる機関・議會制度・種々の労働者大衆への抑圧サービス機関が存在する。「すべての権力を労働者評議会へ！」は未来を決定する出発点となるであろう。

この小冊子の二番目の部分は初めの部分に比べてそれ程大切ではないと私は考える。それは非常に議論の多いところである。例えばこの国でよく知られているセバスタン・フォールの思想は、要約的な形よりも完全な形であつたならもっと有意義なものとなつたであろうと思う。「資本論」「ゴーク綱領批判」「反デューリング論」に書き記されているようなマルクス、エンゲルスの原理のより簡明・適切な説明が、彼の論文にもられているという言明には疑問がある。フォールが彼の論題「労働の測定」にスポットをあてた著作を書いた後に、マルクスの他の著作が世に出たのである。

追加のBは有用な記事であるが、イギリスにおける資料を網羅してはいない。英語版の他の資料はまだ補充される必要がある。

例えばJ・P・ネトルの『ローザ・ルクセンブルク』二巻が、この小冊子による革命初期の分析に加えられていたらもっと有益なものになつたと思う。非常に有益な情報は、ケン・イートン博士の同じテーマに関する未刊の論文によって知ることができる。

パンネコック、ゴルター、ラウフェンバーグその他のより多くの翻訳が出されることが望まれている。

J・トーマル

(『ワーカーズ・レビュー』編集者)

ドイツにおける労働者評議会運動の起源(上)

(一九一八—一九三五年)

革命勃発

一九一八年一月ドイツの前線が陥落し、すべての闘闘機関が粉碎された。キールでは艦隊の将校たちが、彼らの名譽を守る。最後の決戦を決定したが、しかし兵士は不服従でこれに応えた。実際にはこれが彼らのはじめの反抗ではなかった。戦争に抗議するこれ以前の試みはすべて銃弾や斯嘯によって抑えつけられていた。だが、この時の兵士たちの闘いは一挙に成功し、赤旗がひとつの艦から次の艦へと次つぎに掲げられて行った。

兵士たちは各艦ごとに代表を選出し評議会を組織した。この時、兵士たちは運動をさらに押し拡めてゆくことを決定したのである。

抑圧者の側のいわゆる忠誠なる部隊の決死の闘いと言う意味ではなく、敵と死を賭けて闘う決意を彼らは抱いていた。労働者評議会の中核が形成され、やがて彼らは上陸しハンブルグ港を行進し、そこからドイツ全土へ向けてメッセージを發した。代表者たちは汽車その他の交通機関によってドイツのすべての地方に向けて出發した。

自由の最初の一撃が振りおろされ、事態は急速に進展し、ハンブルグは熱狂的に兵士を歓迎した。兵士と労働者は運動のなかで結びつき、労働者も評議会を形成した。実践的には、末だこのような組織は知られていなかったにもかかわらず、わずか四日間のうちに労働者評議会の巨大な網が全ドイツをおおったのである。多分このようなことは、一九一七年—一八年のロシアのソヴィエトにいくつかあったかも知れないが、数の上からいえばほんのわずかであった。この闘いのなかで起ったあらゆる出来事は、どの党どの組織が指導したということではなく、全く自然発生的な運動であった。

評議会の先駆者たち

何がしかの同様の組織が、戦争中いくつかの工場にあらわれたというのは事実である。それらの組織は、ストライキの過程で我々の職場委員に相当する選挙によって組織されたものであった。

ドイツの労働組合主義の伝統においては、組合機構は微少な役目しか与えられず、わずかに地方と中央指令部を結び労働者の要求を伝える結節環にすぎなかった。戦争中においては労働者の要求や不満は非常に高いものであり、主として労働強化と物価の上昇とにその不満は向けられていた。

しかし、ドイツの労働組合はこの時（他の国と同様）、政府と統一戦線を組んでいた。わずかばかりの労働者の利益と、特に労働組合の指導者が種々の政府機関に参画することと引き換えに、政府に対して社会秩序の安寧を保証していた。このため労働者の不満を代表する職場委員たちは厚いレンガの壁の前で頭打ちの状態であった。『厄介者』や『トラブルメーカー』は遅かれ早かれ軍隊へ引きずり込まれ、特殊な部隊へ編入されていたため、組合の内部から闘争を起こしていくことは難しくなった。

その結果、職場委員はだんだんと組合指令部と連絡を断つようになつた。組合の出来事は労働者の関心を寄せるところではなく、労働者の要求はそのまま圧殺され、職場委員たちは秘密に会合をもちはじめた。そして一九一七年非公認のストライキがいきなり全土をおおうことになつたのである。特定の既成組織が指導したのでもなく、それは全く自然発生的なものであったが、当然そこには職場委員の活動のつみ重ねと、労働者の満たされない要求がその土台となつていたのである。

新しい運動

この新しい労働運動は確かにどの党の援助も指導もなしに実現した。いかなる性質のイデオロギー的判断も時々刻々の情勢における運動の拡大に道を切り開くために役立てられたのである。一九一八年のこの突発的な運動は個々ばらばらなものであったが、闘争の形態の同質性の故に次第に統一され、彼らは行政の新しい方法を確立して行つた。一方に普通の形態での警察、食糧管理、労働組合があり、他方にすべての重要工業の中心に労働者評議会が成立していた。ベルリン、ハンブルグ、ブレーメン、ルー

ル、中央ドイツ、サキソニアで労働者評議会は承認され、かなりの数にのぼつた。それはしかし、その時限りのことで、具体的な結果はほんのわずかしが残されなかつた、なぜか。

勞せずして得た勝利

労働者評議会は、きわめて容易に形成されたと言える。国家機構は労働者の苦しい闘争の結果によつてではなく、戦争に疲弊し、解体の危機に頻していた。従つて、いわば真空状態のなかで労働者評議会は運動を展開することになつた。当時、彼らの運動に障害となるものは何もなく、闘いを要せずして成長することができた。ドイツ人はおしなべて誰もが平和を語り、戦争の終結を願つていた。これは一九一七年にロシアが置かれていた状況と基本的に異なるところであつた。ロシアでは最初の革命の波（二月革命）がツァーリの体制を打ち倒したが、戦争は終結しておらず、労働運動は次第に果敢なものとなり、明確な方向性を持ったものとなつていった。労働者の運動はケレンスキー政府に対する圧力を強化しつつあつたのである。しかしドイツにおいては、労働者の要求は平和を直ちに実現することであつた。第一の戦争は終結し、皇帝の権力は共和制に道を譲つた、しかし共和制とは一体何であつたろうか。

ワイマール共和国

第一次大戦後、労働者階級の実践と労働者階級の理論の大部分は、社会民主党と労働組合によつて実行に移され、組織労働者の大多数の支持と承認を受けたものであつた。議会民主主義への道程で形成されたこの社会主義運動にとつて、ブルジョア民主主義国家は社会主義へのテコとなるはずのものであつた。当時の社会

主義者たちは、社会主義への第一歩は議会で多数を占めることで充分であり、社会主義者の大臣たちが一步一步社会・経済生活における国有化を押し進めてゆくことが、すなわち社会主義であると考えていたのである。と同時に実際の状況は、カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグを最も有名な代表として浮び上らせるほど革命的でもあったのである。にもかかわらず、この情勢は決して「国家社会主義」に反対する概念を發展させはしなかつた。反対派は唯一社会民主党のなかに形成されたにすぎず、それも労働者の大多数にとってはほとんど目につかないほどのものであった。

新しい革命の概念

しかし、新しい革命の概念は一九一八年から一九二一年の巨大な大衆運動のなかで生まれて来た。それはいわゆる前衛のつくり出したものではなく、大衆みずからがつくり出したものであった。個々にそれぞれ自立した労働者や兵士は、まさに時宜になつたものとして評議会の組織形態を承認した。それらは全く新しい形態の階級組織であつた。しかし、階級闘争のなかで生み出された諸組織の形態と未来社会の形態の概念との間に直接的な連関がなく、またそこにあるのは古い国有化の思想のみで、誰一人この闘争のなかで生み出された組織形態と連関した未来社会の存り方を論ずる者がいなかったために、やがてこの組織は崩壊し始めるのであった。

労働者たちは、当時、外部の党機関や労働組合の指導なしにみずからの闘争を推し進めつつあつた。労働者たちは自身の評議会という手段によって、社会生活に直接的な影響を及ぼし得ること

ができると考え始めていた。「プロレタリアートの独裁」がそこにはあつたであろう。しかし、それは党の影響下における独裁ではなく、完全かつ永続的な全労働者大衆の統一した意志の表明によるものであつた。もちろん、そのような社会はブルジョア観念の枠組みから見れば、あるいは新しい組織に参加しない大衆の一部であるブルジョアジーにとっては、新しい社会組織のなかで討論、決定のいづれにも発言権をもち得なかつたのだから決して民主的とは言えなかつただろう。

我々は、古い革命の概念が崩壊しつつあると言つたが、しかし、議会と労働組合の伝統はそれが一掃されるにはあまりにも深く大衆のなかに根をはっていることが間もなく明らかになつた。ブルジョアジー、社会民主党、労働組合は新しい革命の概念を打ちくたくためにこの伝統の上に糾合した。とくに社会民主党は、大衆が自分自身の社会生活の領域において自己の権利を主張するこの新しい手段に関する演説のなかでこの組織形態を祝福していたが、それはこの直接的な権力が党の支持を受け、法制化される限りにおいてであつた。だが、この見せかけだけの同調にひきかえ、古い労働者階級の運動の主流は、民主主義を彼ら評議会派が十全に考慮していないという理由で批難したのでは決してなく、彼らの経験の不足を論難したのであつた。民主主義の欠如という批判論はおおむね政治家のために充分な場所を与えず、彼らと政治家との競合から成つていた。いわゆる「労働者階級の民主主義」の要求にたつ古い党と労働組合は、すべての労働運動の潮流が評議会になかに代表され、かなり重要な部所を分有することを要求したのであつた。

異

みずからの奥深くに浸み込んだ信条と通い合うこの論難が誤りであると指摘できるのは、ほんのわずかな労働者でしかなかった。みずからが獲得したものが何であつたかを理解できないままに、労働者の多くは古い伝統的な形態の組織を労働者階級の組織として信じ込んでいた。そのため労働者たちは社会民主主義運動の代表、労働組合、左翼社会民主主義者、消費者、協同組合などの代表が評議会へ参加することを、工場代表者と等しく認めただのであつた。そのような基礎の上立つ評議会では職場代表者もはや直接的な代表で参加することはできなくなつてしまつた。それらはやがて古い形の労働運動の一単位となり、社会民主党を通じて国家社会主義の方法による資本主義の復活のために利用されることになつたのである。

それは労働者の努力をすべてむなしくするものであつた。評議会の代表はもはや職場から指令を受けるのではなく、他の組織から指令を受けて働くこととなつた。労働者は「混乱のなかに社会主義はあり得ない」ということを布令する「命令」の施行に敬意を表し、それに保証を与えるために召集されることになつた。このような情況のなかで評議会は労働者自身の手によって無意味なものとなり、ブルジョア機関は再び、評議会の意見を顧慮する必要を感じなくなり、みずからの機能を取りもどした。これはまさに古い労働運動がたどりついた到達点でもあつた。

古い形態の労働運動は勝利を誇らかにうたいあげることができた。法律は議会で通過し、評議会の権利と義務は詳細にわたつて規定されたのである。評議会のその後における任務は、制定され

た法律が厳守されているか否かを監視することであつた。それはもはや国家を粉碎するものではなく、国家を順調に機能させるための一機関にすぎなかつた。古くから打ち建てられてきた伝統は、自然発生性よりもはるかに強力であることが明らかにされたわけである。

しかしこの「革命の廃棄」にもかかわらず、保守分子の勝利がそうたやすいものであつたと言ふことはできない。新しい労働者の感覚的風潮は、百千の労働者をしていまだなお頑強に彼らの評議会が新しい階級単位としての地歩を保持するために闘わしめる程には有力であつた。五年間にわたつて途絶えることのない対立（ときには武装した闘い）が続き、三万五千人にもおよぶ革命的労働者の虐殺が、ブルジョアジーと古い形態の労働運動、プロシヤの地主と反動的な学生によつて構成された「白軍」の統一戦線によつて、評議会が完全に打ちのめされるまで続けられたのである。

二

政治的諸潮流

おおまかにいって四つの大きな政治潮流が労働者の間にあつた。
1 社会民主主義者 巨大な工業を議会議主義的な方法によつて国有化することを望み、また労働者と国家の間の所有権を仲裁する権利を労働組合にとりつけることを望んでいた。

2 共産主義者 大かれ少なかれロシアの例によつて啓発され、大衆による直接的に資本家から所有権を奪取することを主張した。彼ら革命的労働者は労働組合同盟を横取り、しそれを革命的に

する。ことを主張した。

3 アナルコサンジカリスト 彼らは権力の掌握とあらゆる種類の国家に反対した。彼らによれば、労働組合は未来社会の必須の構成要素であった。社会生活のすべてを労働組合がひき受けてゆけるように、労働組合を成長させるために闘うことが必要であった。最もよく知られたアナルコサンジカリストの理論家は一九二〇年に、労働組合は一時的な資本主義の産物ではなく、言うなれば未来の社会主義的組織の種子であると論じている。一九一九年にはじめてこの運動の時期がやってきたかに見えた。これらの労働組合はドイツ帝国の崩壊の後に成長した。一九二〇年においてアナキストの労働組合は二〇万の人員を保持していた。

4 しかしながらこの同じ年、すなわち一九二〇年に革命的労働組合の勢力は減じつつあったのである。彼らの仲間の大部分は全く異った組織形態、時の趨勢によりよく適合するような形態、名付けて革命的工場組織へ向ってみずからの道を切り開きつつあった。この組織では、各工場は各自自立した、他の工場組織に依存することのない各自の組織を持っていたかまたは持つべきであった。各工場は各々、独立共和国となるべきものであった。

これらの工場組織はドイツの大衆が自然発生的につくり出したものであった。しかし、革命的状況のなかに現われたこれらの組織は、決定的な打撃を受けなかったものの停滞的であった。労働者が直ちに評議会を媒介にして経済的・政治的権力を征服し組織し得ないことはすぐ明らかになった。まず何にもまして、評議会に反対する勢力と容赦ない闘いを続ける必要があったのである。革命的労働者は従って総ての工場で社会生活上の支配権を確保する

ためにみずからの勢力を総点検し始めていた。宣伝活動によって労働者を再醒させ、意識化させ、労働組合を離れて革命的工場委員会に参加することを呼びかけ、総体として労働者がみずからの闘争をみずから導き、経済的・政治的権力を社会全域にわたって勝ち取るために闘った。

表面的にみれば、このように組織面での大きな後退を労働者階級は遂げていた。労働者の権力ははじめいくつかの有力な中央集権的組織に集中していたが、後には工場の重要性に応じて数千人、数千人の労働者を集めた数百の小さなグループに分散していった。実際には、これはそれ自身が労働者権力のあり方の外を示すものであり、その故にこそ、その相対的な小規模さにかかわらずブルジョアジーと社会民主主義者を驚愕させたのである。

工場組織の発達

工場ごと的小グループへの孤立化は計画的なものでもなければ、基本原則の問題でもなかった。それはただ、これらの組織が個別にかつ自然発生的に非公認ストライキ(例えば、一九一九年ルル炭坑労働者の間で行われた)の過程で生じたという事実によるのである。多くの人々がこれらの組織を統一し工場組織の統一戦線を現出しようとしてきた。この統一への呼びかけははじめハンプルグとブレイメンからやって来た。そして一九二〇年四月、工場評議会の統一のための第一回会議が開かれた。代表者はドイツ国内の各工業地域から送られてきており、警察は大会を解散させたが、時すでに遅く、統一組織は創立され、大会は活動の基調を定立していた。この統一組織はドイツ労働者総同盟と命名され、ドイツ語の頭文字をとってA A U Dと呼ばれた。労働者総同盟は

労働組合、法制化された労働者評議会を相手にして闘い、議会主義を拒否することを基調にしていた。この労働者総同盟に参加する組織は最大限の自主性と戦術の選択の自由を持つ権利があった。

結成後直ちに労働者総同盟は発展し始めた。当時、労働組合は後にも先にもその例を見ないほどの加盟者数を持っていた。一九二〇年に社会主義者の労働組合は五二の組合のうち八百万の登録人員を結集していたし、キリスト教労働組合は百万以上の加盟人員を持ち、御用（または黄色）組合はおよそ三十万の加盟者を持っていた。アナルコサンジカリストの組合（ドイツ自由労働者同盟 FAUD）や、しばらく後には赤色国際労働組合（モスクワ支配）に加入したいくつかの時流に抗する組合もあった。

最初労働者総同盟の加盟者数は八万人（一九二〇年四月）であったが、一九二〇年の暮には三十万人となった。それらの構成員の多くが同時に自由労働者同盟か赤色国際労働組合の同調者であったことは事実である。

自由労働者同盟のなかには政治的に意見を異にする者もあり、一九二〇年の十二月にはかなりの数の加盟団体が組織を離れ新たな連合組織 AAUD・E（統一派）を結成、しかしこの後でも自由労働者同盟は二十万以上の加盟員をもっていた（一九二一年の第四回大会のときまで）。しかしこの組織は中味のない張り子の組織であった。一九二一年に起った中央ドイツでの敗北は自由労働者同盟の仮面をひきはがしたうえ、破滅へと導いた。その後の自由労働者同盟はもはや警察の告発に抗して闘う力を持たなかった。

ドイツ共産党・KPD

工場組織の分裂を検討する前に、共産党の役割を考察しておく必要がある。戦争（一九一四―一九一八年）の間、社会民主党は社会の秩序を保証する支配階級の側近であった。ただ例外は、有名なローザ・ルクセンブルグやカール・リープクネヒト等の党役員を含む戦闘的左翼であった。彼らは戦争反対を煽動しはげしく党を批判した。彼らは孤立してはいなかった。彼らのグループ、スパルタクス同盟の他にドレスデンとフランクフルトの「国際主義者」、ハンブルグの「左翼急進主義」、ブレーメンの「労働者党」があった。一九一八年十一月のドイツ帝国崩壊後これらの（社会民主党左派から出た）グループは、新しい政治組織を結成するための街頭闘争に主軸を置き、それはある程度までロシア革命の路線に従ったものだった。彼らはベルリンで統一のための大会（一九一八年十二月三十日）を開催しドイツ共産党を結成した。

党内には「すべての権力を労働者評議会へ」を要求する多くの革命的な労働者がいた。しかしまた、最初から自らを左翼の幹部と考え、古参の権利にもとづいた指導者であると感じ、古い党から持ってきた意見を持ち出す者も多かった。黨員数の拡大の過程で共産党に入ってきた労働者は必ずしも指導者の命令で立ちあがりにはしなかった。ある者は過去の教訓にかんがみて、またある者は指導という考え方が時代遅れであると考えたからであった。

工場組織の思考はずいぶん違った概念を含むものであり、この工場組織についての概念の不統一は誤った解釈の原因となった。それは外部注入によって指導する対象以外の向ものでもない組織と考えることもでき、そして共産党の指導者たちもおおむねそのように理解していたのである。その考え方は全く逆に、下部

の方からの支配の手段とも考えられ、戦闘的な部分はそのような意味にとっていたのである。この新しい感覚では工場組織の思想とは、

1 労働者階級の統一

2 闘争の戦略

3 大衆と指導者との関係

4 プロレタリアートの独裁

5 国家と社会の関係

6 経済的・政治的の制度としての共産主義

以上のことに關して従来考えられてきた思想をくつがえすものを内に秘めたものであったと言える。

これらの新しい問題が起り、それに解答を与えなければならなかった。さもなければ革命は消え去っていったであろう。だが、党の幹部たちはこれらの思想に面と向い合う意志を持っていなかったのである。彼らの行動と思考はすべてが古い党（社会民主党）をモデルにして、新しい党（共産党）を再建するにすぎなかったのである。彼らは古い党の弊害を改めることを回避し、白とピンクのかわりに赤の色をぬったにすぎず、新しい思想の入り込む余地はどこにもなかった。当時、この新しい思想はひとつの頭脳から生み出されたように、あるいは天からでも降ってきたかのように、全体として一貫した形で表わされていなかったのである。それは新しい世代の思想であり、共産党の若い戦闘的部分の多くはこの新しい思想を支持していたが、それと同時に古いイデオロギー的な土台に対する尊敬の念が黨員の間にはなお根深く残っていた。

議会主義

共産党は結成当初から、「工場組織」という新しい考え方にもとづいて提起されたどのような問題に対しても、統一した見解を持ち得ず各派様々に意見が分れていた。そのため社会民主党々々エーベルトが立憲議会の選挙を布告した時、選挙に参加するのかわるいは選挙に参加せずに選挙批判の運動を展開するのかわ、そのいずれを取るかの決定を迫られた。この問題で大会はわかえるような激論が聞わされた。労働者の大多数は選挙参加を全面的に拒否する意向であったが、リーブクネヒト、ルクセンブルグを含めた党指導部は、この立憲議会選挙にうって出ることを宣言したのである。しかし当然、党大会の決定投票で党の指導部は決定的にたたかれ、黨員の大多数は反議会主義を宣言したのであった。大会において、立憲議会が単にブルジョアジーに法的根拠を与えブルジョア権力を支えるためのものにすぎないという見解が明らかにされた。共産党のプロレタリア分子は単なる反議会主義ではなく、既存の労働者評議会を蘇生させ、更に新たな労働者評議会を組織し、「すべての権力を労働者評議会へ」のスローガンに示される民主主義の建設を通じ、労働者階級の民主主義と議会民主主義の相違を大衆の前にあきらかにしようと考えたのであった。

共産党の指導部は、この反議会主義のなかに革命的思考の蘇生を見ることができず、彼らは心秘かに、産業資本主義のはじまりにつらなる労働組合主義者やアナキストの思想の「侵略」を感じていたのであった。だが事実から言えば、新しい潮流としての反議会主義は「革命的サンジカリズム」や「アナキズム」との間にはほとんど共通性のあるものではなかった。絶対自由主義者の反議会主義が政治権力、とくにプロレタリアートの独占を拒否したのに

対し、新たな潮流は反議会主義を政治権力を奪取するために必須の条件と考えたのであった。それはまさしく「マルクス主義の反議会主義」であった。

労働組合

労働組合に対する見解は共産党の指導部と工場組織の指導部とは異っていた。当然予想されることであつたが、激烈な論争がくり展げられた（この大会の後、リーブクネヒトとルクセンブルグは歴史の舞台から消え去ることになったが反動の手によって二人は虐殺されたのである）。評議会の支持者は労働組合から離れて工場組織に労働者を結集し、労働者評議会を組織することを呼びかけたのに対し、共産党の指導者は労働組合に留まることを主張したのである。共産党の指導者は労働組合の指導部を自分たちの手に入れることができると考えなかったが、地方の指導部を手中に収められるとは考えていた。当時これら地方の労働組合を「革命的」な労働組合運動として統一することは可能であつたかも知れない（またドイツ共産党はそれが可能であると信じこんでいたのだ）。

しかし、ここでも共産党の指導部は闘いに敗れたのである。党内のほとんどの党派がこの指示を実行に移すことを拒否したからである。この時、党の指導部は党員の大部分を除名するという大きな犠牲を払っても党の方針を変えようとはしなかった。いうまでもなくその活動は、ロシアの党とその党主レーニンに支持された（レーニンはこの時、あのわざわざ多き小冊子『左翼小児病』を発行した）。

一九一九年十月のヘルデルベルク大会で指導部は「民主的」に

党員の過半数を除名することに成功した。以来ドイツ共産党は（実りの少ない）議会と労働組合を軸とする戦略に導びかれることになる。一方、除名された党員たちは左派社会党の名のもとに結集した（党員数はその後四倍と増加したが、わずかに三年しか続かなかつた）。彼らは更に新しく共産主義労働者党（KAPD）を結成した。一方、ドイツ共産党はその戦闘的分子のほとんどを失い、みずから方針を決定することを中止してモスクワの指示に盲従することになった。

共産主義労働者党

共産主義労働者党（KAPD）は直ちに労働者総同盟（AAUD）と緊密な関係に入る。当時にあつては共産主義労働者党は強力な党の一つであり、議会と労働組合に対する批判と直接行動の実践、資本家の搾取に対決する闘いは何にもましてすべての職場労働者に大きな影響を与え、マルクス主義の退潮期にあつてマルクス主義文献のなかで最良のものであつた彼らの出版物によつてもまだその影響力は大であつた。だが、共産主義労働者党も依然として古いマルクス主義思想の旧弊を留めていたと言える。

三

共産主義労働者党と労働者総同盟

1 その相違について

しばらく党のことを離れて工場組織に話をもどそう。この若い組織は、重要な変化が労働者階級の世界に起つてゐることをはっきりと語り、次の諸点については広汎な同意があつた。

1 新しく建設され成長を続けなければならないこと。

2 その構造は指導部の関を形成せしめないようなものであること。

3 ひとたび幾千万の労働者によって建設されたならば、それはプロレタリアートの独裁を樹立するものであること。

労働者総同盟のなかには主として二つの論争があった。第一は、労働者総同盟の外部に労働者の政治的な党が必要であるか否かについてであり、第二には社会・経済生活的な管理の仕方に関する問題をめぐるのであった。

初めの頃労働者総同盟とドイツ共産党とはかなり深い関係を持っていたが、その関係は、ひとたび共産主義労働者党が結成された後では以前と違ったものに変質したのである。共産主義労働者党は結成後直ちに労働者総同盟の様々な問題と取り組むこととなる。しかし労働者総同盟のかなり多くの同盟員にこのことに反対であった。サキソニー、フランクフルト、ハンブルグなどでは共産主義労働者党と一緒に仕事をすることに強い反対があった。ドイツは当時はまだ、さわめて地方分権的な国家であって、その傾向は労働者の組織にも反映していたのである。そのため共産主義労働者党はある地方では、労働者総同盟と共同して活動することが可能であっても、他のところではまったく不可能であった。結果としては、労働者総同盟のなかに指導者関を結成することに反対する戦闘的な部分が、総同盟を去って統一派を結成した。労働者同盟統一派はプロレタリアートの党の思想を否定し、工場組織一本で充分であると考え主張したのである。

共通の基盤

これら三つの潮流は情勢分析の点では一致した見解を持ってい

た。その見解とは、プロレタリアートがマルクスの時代には社会的にごく一部の限られた少数派であり単独に闘うことができず、従って他の階級との同盟を求めなければならなかったのに対し、当時においては社会の歴史的な変化によってもはやそのような少数派ではないというものであった。少なくとも西欧の進んだ国においてはそうであったと言える。西欧の国々ではプロレタリアートは総人口の多数を占め、ブルジョアジーのすべての層は大資本のもとに結集していた。そのため革命はプロレタリアート独自の仕事であり、資本主義は死滅の時期に向っていた。

少くとも西欧において社会情況が変化したとすれば共産主義の概念も当然変らねばならない。古い諸組織の古い思想は社会解放とまったく逆の思想を代表すらしていた。労働者総同盟統一派の有力な理論家の一人、オットー・リマーレは一九二四年に次のように言っている。「社会民主主義の、また同時に共産主義の綱領である生産手段の国有化は社会主義化を意味しない。それはいくらかは私的資本主義に卓越しているかも知れないが、それは生産手段の国有化による強力的に中央集権化された資本主義であり、資本主義であることにかわりはなく国家資本主義に行きつくものである」。

共産主義は労働者みずからの活動そののみによって到達し得るものである。そのために新しい組織形態が必要であるが、そのような組織形態とは一体どのようなものであろうか。ここで意見が分かれ、対立は果てしない分裂の原因となった。このとき労働者が革命活動から離れ、運動上の決定が殆んど成果をあげ得なかつたにしても、労働者が理解していた未来社会の像を記して留めて

おくことは有益なことであろう。

二重組織

共産主義労働者党はロシア革命後優勢となってきたレーニン主義（大衆党）の思想を拒否し、量よりも質に重点をおいた基本的にはエリートの党である革命党の思想を保持していた。労働者階級のなかで最も先進的部分が結集した党は、大衆のなかにあつて酵母として働かなければならず、例えば、宣伝煽動活動を展開し、政治討論をまき起す等の活動を展開する役割を担い、その戦略は階級対階級の闘争、工場における闘争、武装蜂起、ときには予備的な闘争として二十世紀初頭にしばしば起つたようなテロル活動（爆弾投下、銀行略奪、宝石店襲撃のような）等の闘争に基礎をおくものであつた。行動委員会の指導する工場での闘争は、大衆闘争に必要な階級意識と闘争の雰囲気をつくり出し、更に多くの大衆を決定的な革命闘争に起ち上らせる効果を生み出すようなものであるべきであつた。

この党の第一級の理論家であつたヘルマン・ゴルターは小さな共産党の必要性を次のように理論化している。

プロレタリアートのほとんどは無智である。彼らは政治・経済に関してほんのわずかな理解しか持たず、国家的または国際的事件、国際関係とそれが革命に及ぼす影響等について多くを知らない。社会的状況が彼らをこのようなことに関する知識を得られないところに押し込んでいるのである。正しい瞬間に正しい行動を取れない理由がここにある。彼らは行動すべきでない時に行動し、行動すべき時に行動しない。そして何度も同じ誤りをくり返すのである。

（「レーニンへの回答」ゴルター パリ 一九三〇年）

従つてこの理論によれば、この小さなエリートの党は大衆を教育する使命を帯び、思想の触媒剤であつたのである。しかし、大衆の再結集と工場組織の綱の目に彼らを組み入れる仕事は労働者総同盟の仕事であるべきものであつた。その目的の基本線は、労働組合の影響を宣伝その他の決定的な活動を通して押し返し粉碎することにあつた（活動とは「大衆がいかなる大衆にならねばならぬか」を闘争のなかで指し示すグループの活動である「ゴルター」）。結局、革命闘争の道程においてこれらの工場組織は労働者を統一し、労働者みずからが支配する労働者評議会になるべきものであつた。そして「プロレタリアートの独裁」とは労働者総同盟がドイツ全土に拡張されたものにはかならなかつた。

労働者総同盟統一派と論争

共産主義労働者党はすでに述べたように工場組織を離れた政党に反対した。それは日々の闘争を指導し、やがては労働者評議会の制度のもとで社会行政を引き受け得る統一組織であることを望んでいた。それは政治経済の両面にわたつて指導し得るべきものであり、同時にその組織は、労働者階級の政治権力とプロレタリアートの独裁に敵対する革命的サンシカリズムとは異なるものであつた。またその組織は労働者階級の意識の遅れなどという議論を容れてKAPD型の政党が必要であるという見解を持つものでもなかつた。と言うのは、彼らにとつて工場組織そのものが言論の自由が保証されている限り教育的役割を果すに充分なものであつたからである。

労働者総同盟統一派は、共産主義労働者党を職業的指導者と雇

われ編集者でもって中央集権化され、しかもドイツ共産党とはただ議会主義を否定するという点でだけしか区別できないものであると痛烈に批判した。彼らは指導者の利益のための「二重組織」を「二重の隠し札」と言って嘲笑した。統一派は雇われ指導者を拒絶し「トランプ遊びも政治も断じてそのようなものではない」と言う。統一派の幾人かは反組織のための組織をつくるどころまで行ったのである。

おおまかにいって労働者同盟は、仮に労働者がある決定をするにはあまりにも弱い、あまりにも分散している場合でも、いかなる党の決定もこれにとつてかわることはできないという見解を持っていた。誰もプロレタリアートの座を奪うことはできない。プロレタリアートはみずからの欠陥はみずから自身の力で克服し、また打撃をこうむればその重い代償をみずから負わなければならぬのである。彼らにしてみれば、二重組織は政党と労働組合の協力から生まれた一つの遺産にすぎなかった。

これらの三つの脈流、共産主義労働者党、労働者総同盟、労働者総同盟一派の意見の相違は、一九二一年の中央ドイツでの反乱に他の二つが参加することを拒否するという結果となって現われた。この反乱は共産主義労働者党（当時まだ第三インターに同調的であると考えられていた）の武装分子によって指導され決起したものであった。後に統一派はその反乱は単にロシアで起っていることをカムフラージュするためのものであり、特にクロンシュタットの水兵と労働者に対するトロツキー指揮下の赤軍の弾圧を陰弊するためのものであると表明したのである。

内部の意見の対立は激しく、しばしば個人攻撃によって論争点

がぼやかされることもあったが、また過度の対立がいわゆる其共産主義精神」に対する幻滅感を大衆のなかに引き起したきらいもあった。しかし、暴力的な直接行動とすべての色あいの政党、労働組合（モスクワの宮延市長も含めて）に対する情熱的な反対運動は大衆のなかに浸透し続けたのである。この傾向のすべての政治潮流はまだ注目すべき出版物をもち、ときには不法な手段で運動資金を得ていた。そのメンバーは破壊的な活動の故に解雇されることもあったが、それらの出版物は街や公開の会合の場で大いに活用されたのであった。

絶望

一九一九年から二〇年までの工場組織の成長はコンスタントに発展し、やがては既成の労働組合から権力を奪い取れるような巨大な意識的共産主義者の運動にまで成長すると思われていた。しかしこれらは事実としては証明されなかった。彼らは、プロレタリアートが組織された階級としてみずからを闘いと、新しい組織の建設への道を切り開くであろうと言う仮定から出発した。

労働者総同盟やその統一派の成長のなかに労働者の戦闘的精神と階級意識の発揚は見られたが、これらの組織はいずれも一九二三年から一九二九年の経済的膨張のなかで次第に衰えて行った。この衰退の時代に多くの工場、二千万にもぼる工場労働者の間にいくつもの細胞があちらに一つこちらに一つと言った具合に、組織員がわずかに数百人というところまでおちていった。この時ヒットラー主義者が歴史の舞台上に登場し、工場組織は意識的な評議会共産主義者の細胞である労働者の「総」組織から、細胞の散在、組織員数百名という情況にまで落ちていた。労働者総同盟、また

その統一派が何を言っても、その目的がどのようなものであってもはや弱少党以上の何ものでもなくなっていた。一つづー
(※訳注は(下)にまとめて掲載します。)

編集後記

昨年十月に出した『リベロー』のセミナー報告集の後も継いで、本誌が発行されることになった。一年の間、やれるだけのことをやろうといった意気込みで、隔月刊行である。

定期的な刊行物の企画は、現在センターにある資料の翻訳や紹介といった活動の場として、前々から要望されていたことである。月刊リベロー紙もその一端を担うものであったし、その特集号として出された本誌は、リベロー紙の内容的・量的な面を補うものでもある。それともう一つ、大きな動機がある。それはセンターの例会参加者の間で研究テーマが提起されたことである。外国のアナキストグループの現状とその活動、戦後日本のアナキズム運動史、朝鮮人アナキストの運動史の三つのテーマがそれである。

テーマ一つ一つの背景ははしめるが、外

国のアナキストグループに関しては毎号可能な限り詳細なレポートを連載していく予定であるし、戦後の運動史は年表の形で研究の成果が逐次発表されるだろう。また朝鮮人の運動に関しては三号で特集を組むことにしている。いわば、研究テーマを突きつめていく必要に駆られたことにも、少なからぬ本誌発行の原因があると言えよう。また当初、不定期刊行という話が、季刊となり、年四冊では足りまい、ということはどうとう隔月となった。乱暴な話ではある。スタッフや資金の裏付けなしに計画が進められたことから、早速二号は遅れて発行という次第となってしまう。まあこれは編集を担当した者の言い訳で、三、四号で偶数月発行が果されよう。

× × ×

本誌の母体である月刊『リベロー』が今年の二月号よりセンターより独立し、情報

紙としての途を追求することになった。昨年九月以来同紙刊行を推進した羽熊苦および新編集部の今後の活躍を期待したいと思います。(発行・リベロー社 京都市左京区田中門前町二八の五 一部三〇円)
本誌の東京での連絡は 練馬区豊玉北六の十・山本方 奥沢まで

× × ×

今回はスケジュールの無理がたたって、校正の段階で企画を三つ程削ることとなった。追加を予定していた原稿が出来なかつたことと、翻訳文の不備によるものである。いずれも次号に掲載することにした。

リベロー 二号

一九七四年三月七日

発行所

日本アナキズム研究センター
静岡県富士宮市杉田二五一
武一郎 敬付